



へいふういっばん * ちくしょう ** 「弊風一斑：蓄妾の実例」

名誉院長 西田 敬

黒岩涙香。明治の作家、文字通りの啓蒙家、journalist（日刊新聞、萬朝報の発行人）で、且つ翻訳家。鷗外、漱石ですら、ルビ(ruby)なしでは読めなくなった現代人にとっては、タイトルも又然りで、逐一の解説が必要乎。即ち、弊風とは悪い習慣。一斑は獣、特に、豹の毛皮に現れる斑紋。一斑を見て、豹全身の威容を想起する可し。蓄妾とは妾を囲う事。之こそが男社会の象徴であり、社会的な悪癖として糾弾し、社会から抹殺する事が使命と考え、萬朝報の紙面での告発に望みを託した。

「眼無王侯。手有斧鉞」。手には、悪を打擲する斧鉞(鉞)有り、王侯と雖も容赦するもの乎!この勇ましい檄文は、朝報社の壁に掲げられた、モットー(社是)。他人様の仕事内容を評価、並びに暴露では、昨今、ミシユラ

ン社員に依るレストランの抜き打ち審査が勇名だが、朝報社の暴露はもっと凄い、蓄妾と云う弊風を社会的に誅滅せんが為の暴露。語り、他人の醜聞(scandal)を暴き公表する。今なら名誉棄損で下手すりゃ訴訟モノ、いや、相手次第では無礼者!一喝の基に御手打ちのおそれ危惧も。

腰前が違う。明治31年7月7日から9月27日までに蒐集した510件を、萬朝報の紙面に連日で掲載した。文字通り、眼無王侯。好餌と為った著名人には渋沢栄一、犬養毅に加え、北里柴三郎、森鷗外、伊藤博文など等、錚々たる斯界の一流、著名人が綺羅星の如く軒を並べる。

発刊、3月に満たずして畜妾弊風は社会の上流を含む全層に蔓延る事実が暴露された。出る釘は打たれる。涙香の萬朝報の記事にも毀誉褒貶の嵐が巻き起こった。

蓄妾の弊風を操觚界(journalismの分野)より吹払う算段が、密偵→露見→暴露と云う、稍々、姑息的とも評し得る方法論も相俟って、惻隱の情、溢るる大和男としては忸怩たるものを禁じ得ない。然し、悪者弊者の重囲中に「唯、独り奮闘し、唯ひとり斃るるを覚悟す」と涙香は記した。

*一斑:豹の毛皮の斑紋。

一つを見て、豹全身の威容を察知せよ!

**引用資料:社会思想社、現代教養文庫1427

